エッセイ

村に時計がやってきた

山本　光正

江戸から明治へ。村にも時計が入ってきたようで、手許にある明治10年の日記には「12時頃云々。２時頃云々」と云う記事が見える。それにしてもどうやって時計の時刻を合わせたのだろうか。

今筆者は近世から近代にかけての日々の出来事を綴った日記や旅日記を読んでいる。当然現代の生活とは大きく異なるので、様々な疑問や関心が次から次へと湧いてくる。その一つが時刻である。

近世の日常の日記にしても、旅日記にしても時刻が記されていることが多い。近世の庶民が日常生活の中で時刻を知るのは主に時の鐘や太陽の動きであったろう。言うまでも無く近世には現在和時計と呼ばれる不定時法の時計や香時計があったが、値段も高く持ち歩けるものではなかった。

旅日記にもよく時刻が記されるが、時に日の暮れた山中での時刻を記している場合がある。寺の鐘だろうか。

現在読んでいる旅日記の一つに『朝生家日記』(1)がある。『朝生家日記』に定時法の時刻が記されるのは明治10年のことであるが、現存する日記は明治６年そして次が明治10年であるため、その間に定時法の時刻が記されるようになったのだろう。参考までに明治６年と10年の時刻の表示を引用しておこう。

ちなみに日本に於いて太陽暦が採用されたのは明治５年のことで、同年11月９日に改暦が布告され12月３日を明治６年１月１日としている。突然の改暦であったため、朝生家に限らず暫くの間は太陰暦を中心とした生活であったようだ。朝生家の明治６年の日記は１月29日から始まっている。それはこの日が太陰暦＝旧暦の元旦であったからである。時刻の表示に戻ろう。

明治６年２月２日
　七ツ時頃浦田村金左衛門殿、昨年元金百両之利金拾五両持参、

余談だが旧暦から新暦に伴い旧暦時代の金銭の貸借期限などはどうなったのだろうか。

明治10年１月２日
　母市場町へ買物ニ行、反物掛ヶ・鮭壱本代弐貫八百文・ほふろく一ッ、此外品々買十二時頃帰り、
　　１月４日

1　千葉県君津市久留里大谷朝生家文書

母々（ママ）市場町へ廻り用事致し、二時頃帰り、

定時法の時刻を記すことは時計が無くても出来るだろうが、不定時法の時より定時法になってからのほうが時刻表示が多くなったようである。朝生家では時計を購入したのかもしれない。

そうなると気になるのはどうやって時刻を合わせたかである。懐中時計ならば時計屋に一応正確な時を刻む時計があれば、それに時刻を合わせればよいだろう。日にちが経てば誤差が生じるのは取りあえず措いて。しかし柱時計では合わせようがないではないか。柱時計を作動したまま運ぶことは不可能である。

時計のことが気になりだした時に目につくようになったのが日時計である。直径５～６㎝程の木製の懐中時計のようなものの蓋を開けると日時計になっている。磁石が組み込まれており、紙にギリシャ数字の書かれた文字盤が貼り付けてある。ここにセットされている金属板の影が投影し時刻を知るわけである。

この外金属製の二つ折りのものを広げると日時計になるものもある。極めてシンプルなもので、日時計としての目盛が無い。よく見ると南中を知るためのもののようである。

時計の時間をどのようにして合わせるか、という疑問はその後郵政の研究会に参画して氷解した。それは郵政博物館の井上卓朗氏より「正午計」の存在を知ったからである。

正午計は近代郵政史研究者にとっては常識かもしれないが、近世史を専攻する者の大半は知らないであろうから、簡単に説明しておこう。井上卓朗著「ていぱーく（逓信総合博物館）資料紹介⒄　正午計」(2)によると、正午計について次のように記している。

> 正午計は日時計の一種で、特に太陽の南中時を測定する機能を重んじた計器である。江戸期の日時計は日中の時間を知るのに使われていた。明治期になると、郵便局を元として西洋時計が普及していったが、当時の時計は、現在のように正確ではなく、当然ながらラジオやテレビによって時刻を知ることもできないので、「正午計」を使用し、太陽が真南に来る時刻を正午として時計の時間を合わせたのだと考えられる。

時間の正確さを要求されたであろう郵便局には時計が配備されたが、正確な時間の合わせようがなかったのだろうとのことである。まさに村に入ってきた時計と同じ状況である。

当然南中の時刻は地域によって異なるが、その調整は井上の論考に詳しい。村においてはそこまでの正確さは要求されなかっただろう。郵便局において使用されていた正午計はかなり精密なものであったろうが、林善介なる人物が軽便ではあるが正確な正午計を製作し、明治23年に特許を取得している。こうした正午計が普及する以前にあっては天を仰いで南中を知るか、簡単な日時計で南中を知ったのであろう。

不定時法により時刻を認識していた時代は、暮らしの中の最小時間単位は一時（いっとき）あるいは半時であっただろう。一時の長さは季節によって異なるが、約２時間である。生活の速度もゆったりとしていたのである。人を訪ねるにしても必ずしも前もって約束をするわけで

2　『郵便史研究』第33号、2012年３月、28～32頁。

はなく、訪ねて相手が不在であれば暫く待ち、帰宅したという話を読んだ覚えがある。筆者は社会の動きは人間の移動の速度と同様と考えている。鉄道が発達するまでは基本的には歩く速度が社会の動きであった。鉄道が発達すれば社会の動きは鉄道の速さになっていく。

社会の動きと一体になるものが時間であることを、この一文を書いていて改めて認識した。和時計＝不定時法の時代において、定時法でいう30分などという時間の感覚、捉え方はほとんどなかったであろう。それが30分・10分となり、電車が１～２分遅れても駅の構内放送が流れる時代になっている。

そうそう、スポーツの世界では１秒以下の時間が大手を振るっている。

近世や明治初年における時間の認識は大別すれば午前と午後、そして午前および午後の前半・後半というところであったろう。このような時間に対する認識で世の中が動いていたのである。現在から見れば極めて曖昧・ファジィーな時代であったように見えるが、それで社会は支障なく動いていたのである。余りにも現代的視点から江戸という時代を見過ぎると、本質を見失ってしまうだろう。

（やまもと　みつまさ　交通史学会　会長）